

投稿論文

生徒との関係に悩む中学校教師への支え
および対処方略に関する研究
—— 性別および年齢による差異の検討 ——

都 丸 けい子^{**}

庄 司 一 子^{**}

Research on lower secondary school teachers' stress coping
and support to the teachers who have troubled feelings
concerning the relations with their students:
The difference by sex and the age

Keiko TOMARU

Ichiko SHOJI

本研究は、中学校教師の生徒との関係における悩みに焦点を当て、その対処方略と悩む教師への支えに関して、より詳細な検討を行い、また教師の個人属性との関連を明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の二点について検討した。第一に、生徒との関係に悩む教師を支えるものについて、教師の性別・年齢による相違を明らかにすること、第二に、生徒との関係に悩んだ際の対処方略について教師の性別・年齢による相違を明らかにすることである。中学校教師290名を対象に質問紙調査を行った結果、生徒との人間関係に悩む教師への支えおよび対処方略には、性別・年齢による差異が一部存在することが明らかとなった。具体的には、20代の男性教師にとって、管理職からの支えが特に重要であることが示された。また、対処方略において、女性教師は情緒を安定させることで悩みに取り組む傾向があった。さらに、教師は年齢を重ねることで、悩みにより積極的に対処できるようになっていくことが示された。

※筑波大学大学院人間総合科学研究科博士課程

※※筑波大学大学院人間総合科学研究科

問題の所在と目的

十数年ほど前から教師のストレスや疲労、バーンアウトに注目がなされ、多くの研究がなされてきた (e. g., 宗像・椎名, 1988; Burke & Greenglass, 1995; 齋藤, 1999; 新井, 1999)。その背景には、いじめ、不登校といった学校の抱える教育問題や、変化する児童生徒の対応に日々追われ、多忙感が尽きないといった教師をとりまく状況の変化があると考えられる。文部科学省 (2005) によれば、2004年度の精神疾患による教職員の休職者数は3559人で、2003年度に引き続き病気休職者数の半数を超えており、調査を開始した1979年以来、最大である。また、石井・中野 (2001) が、小・中・高等学校に在職する教師を対象に行った調査では、日常仕事の中でストレスを「非常に感じる」あるいは「感じる」と回答した教師が半数を超えている。

こうした調査からわかるように、子どもの成長を支える教師たちが、今、自分自身の危機にさらされている。しかし、このような現状にもかかわらず、新井 (1999) が指摘するように教師に対する支援は乏しく、日々の教育実践において悩みを抱えながら、その対応に苦悩する教師も少なくない。

教師の抱える悩みは多様だが、概して上位に上げられるのは対生徒・保護者・教職員間の人間関係である (e. g., 宮本, 1998; 齋藤, 1999; 中島, 2000)。教師の抱える問題は子どもたちに多大な影響を及ぼすことが指摘されている (秦, 1998)。特に生徒との関係で悩む教師は、教師であるために悩みの原因である生徒との関わりを避けることができない。そのため、関わりを続けることで、生徒へ悪影響が生じるばかりでなく、相互作用を通じてさらに教師の側にも心労が積み重なるといったように、教師-生徒関係に悪循環を引き起こす可能性もある。そのため、生徒との関係にストレス・悩みを軽減・予防するための支援は急務と考えられる。

教師という職業において、ある程度ストレスがあるのは当然としても、それと如何にうまく付き合うか、またそれを如何に解消していくかが現在求められている。特に、生徒との関係は日々の教育実践において大きな割合を占めるため、生徒との関係に悩みを抱く可能性は高く、解決や支援が急務である。また、教師のストレス・悩みに焦点を当てた際、児童生徒の発達段階を加味すると、特に中学校教師が他の学校種と比べ、最も生徒との関係形成が困難である (e. g., 横島, 1988; 原岡, 1990)。

生徒との関係における悩みは、多くの教師が教職生活を営む中で自ずと直面する事柄である（都丸・庄司，2005）。教師は悩みにはいかに取り組んでいるのか、また何が支えになっているのかを検討することは、教師のストレスや疲労、バーンアウトの予防策および対処策を構築するための重要な知見になると考えられる。そのような理由から、都丸・庄司（2005）は、中学校教師の生徒との関係に悩む教師への支えおよびおける対処方略に関して検討し、「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」尺度および「生徒との関係における悩みへの対処方略」尺度の作成を試みた。そこでは、ストレス・悩みの予防と対策についての先行研究の中でも、特にストレスへの対処方略やソーシャル・サポートの有効性に焦点を当て、生徒との関係で悩みを抱えた場面に限定した対処方略および、ソーシャル・サポート等の外的な資源や教師自身の内的な資源を含む支えについて検討している。ここで、本研究で用いる「支え」という語は、教師自身の内的な要因による支え、周囲からの援助による支え、外的な環境・状況による支えを内包する概念である。それらに共通する点は、悩みに取り組むことができた、または悩みを抱きつつも教職を続けてこられた理由や動機として認知されたものという、教師の内的な認知を重視する点である。悩む教師への支えを、始めから内的・外的要因別に検討するのではなく、「悩みに取り組む上で支えとなった」という認識を重視することにより、都丸・庄司（2005）は新たな概念として探索的に「生徒との関係に悩む教師への支え」について検討した。以上の理由により、先行研究においてこれまで用いられ、概念の類似した用語である「援助」、「支援」、「サポート」等とは異なり、悩む教師への支えとは外的に付与されたものにとどまらず、悩みに取り組む教師の内的な認識を重視している。

そこで本研究では、中学校教師の生徒との関係における悩みに焦点を当て、その対処方略と悩む教師への支えに関して、より詳細な検討を行い、それらと教師の個人属性との関連を明らかにすることを目的とした。具体的には、以下の二点について検討する。第一に、生徒との関係に悩む教師を支えるものについて、教師の性別・年齢による相違を明らかにすること、第二に、生徒との関係に悩んだ際の対処方略について教師の性別・年齢による相違を明らかにすることである。

なお、本研究において、教師の個人属性として特に性別と年齢に焦点を当てた理由は、ストレスへの対処方略とソーシャル・サポートに関する先行研究において性別と年齢による差異が指摘されていることによる。したがって、本研究にお

いても同様に性別と年齢に焦点を当てることで、生徒との関係における悩みという特定の悩みに関する、教師の中でも特に我が国の職業集団としての中学校教師についての特徴が検討できるものと考えた。

方 法

調査対象者

A県、B県、C県の公立中学校、計22校の教師500名に質問紙を郵送、もしくは直接手渡しにて配布した。回答に不備があったものを除いた有効回答数は290名であった（回収率58.0%）。性別は男性173名、女性116名、不明1名。また、年齢構成は20代40名、30代88名、40代136名、50代以上24名、不明2名。平均年齢39.39歳である。

質問紙

フェイスシートで、性別、年齢、現在の役職について尋ねた後、以下について回答を求めた。

(1) 生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えについて

入職から現在までに、悩みを抱いた際に悩みに取り組むことができた、もしくは悩みを抱きつつも教職を続けてこられた理由や動機を「教師への支え」と捉えた。都丸・庄司（2005）の作成した24項目からなる「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」尺度を用いた（Appendix 1）。生徒との関係に悩みを抱えた際に支えとなるものについて、「当てはまらない（1点）」～「あてはまる（4点）」の4件法で回答を求めた。この尺度は、「同僚」、「教師としての自信」、「管理職」、「責任感」、「楽観的思考・気分転換」の5つの下位尺度から構成され、信頼性と妥当性が確認されている。「同僚」は、「同僚の先生の励まし」など5項目からなる。「教師としての自信」は、「精神的な強さ」など6項目からなる。「管理職」は、「管理職の励まし」など3項目からなる。「責任感」は、「教師なのだから何とかしなくてはという責任感」など5項目からなる。「楽観的思考・気分転換」は、「何とかできるだろうと悩みすぎない性格」など5項目からなる。

(2) 生徒との関係における悩みへの対処方略について

教師の生徒との関係における悩みへの対処方略を検討するため、都丸・庄司（2005）の尺度を用いた（Appendix 2）。生徒と関わる中で困難を感じたり悩んだ場面を振り返り、普段どのような対応をとることが多いかについて、「全くしない

(1点)～「いつもする(4点)」の4件法で回答を求めた。この尺度は、「消極的態度」,「情緒調整」,「問題解決行動」,「認知変容」の4つの下位尺度から構成され、信頼性と妥当性が確認されている。「消極的態度」は、「自分にはどうしようもないので、仕方がないと思う」など7項目からなる。「情緒調整」は、「今の状況を人に話し、気持ちをわかってもらおう」など4項目からなる。「問題解決行動」は、「具体的な対策を立て、これからどうしたらよいかを考える」など2項目からなる。「認知変容」は、「この経験から得るものがあると考え、よい機会だと思おうようにする」など3項目からなる。

結 果

1 各尺度の下位尺度の検討

(1) 「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」尺度の下位尺度の検討

「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」尺度の各下位尺度ごとに、得点を加算し項目数で除した値を因子得点として用いた。「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」の因子間の選択頻度の相違を検討するため、因子得点の平均値の比較を行った。得点の高いものほど、より教師への支えとなっていると見なすことができる。被験者内の1要因分散分析の結果、得点間に有意な差がみられた($F(3.21, 870.02) = 56.60, MSe = .35$)。多重比較(Tukey-HSD法, 5%水準)の結果、「同僚」($m = 3.16$)は、「教師としての自信」($m = 2.96$)、「管理職」($m = 2.68$)、「責任感」($m = 2.60$)、「楽観的思考・気分転換」($m = 2.63$)よりも、生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えとして有意に認識されていた。また、「教師としての自信」は、「管理職」,「責任感」,「楽観的思考・気分転換」よりも、生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えとして有意に認識されていた。さらに、「管理職」,「責任感」,「楽観的思考・気分転換」の間にはそれぞれ、有意な差は認められなかった。

(2) 「生徒との関係における悩みへの対処方略」の下位尺度の検討

「生徒との関係における悩みへの対処方略」の各下位尺度ごとに、得点を加算し項目数で除した値を因子得点として用いた。「生徒との関係における悩みへの対処方略」の因子間の選択頻度の相違を検討するため、因子得点の平均値の比較を行った。得点の高いものほど、より悩みへの対処方略として選択されやすいと見なすことができる。被験者内の1要因分散分析の結果、得点間に有意な差がみられ

た ($F(2.50, 697.37) = 259.38, MSe = .38$)。多重比較 (Tukey-HSD 法, 5%水準)の結果, 「問題解決行動」 ($m = 3.22$) は, 「消極的態度」 ($m = 1.94$), 「情緒調整」 ($m = 2.74$), 「認知変容」 ($m = 2.90$) よりも, 生徒との関係における悩みへの対処方略として有意に選択されていた。また, 「認知変容」は, 「消極的態度」, 「情緒調整」よりも, 生徒との関係における悩みへの対処方略として有意に選択されていた。さらに「情緒調整」は, 「消極的態度」よりも生徒との関係における悩みへの対処方略として有意に選択されていた。

2 生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えの性差および年齢差の検討

「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」尺度の下位尺度の基本統計量と性差および年齢による差を算出した。

始めに, 性別による差異について検討した結果, 一部に有意な差が認められた (Table 1)。具体的には, 女性よりも男性の方が, 「管理職」が支えになったと有意に認識していることが明らかとなった ($F(1, 290) = 2.82, p < .01$)。

次に, 年齢による差異について検討した。なお, 年齢に関しては, 20代, 30代, 40代, 50代以上で区分し検討した。その理由として, それぞれの年代の平均年齢と先行研究 (河村, 1996) の経験年数の4区分 (6年以下, 7~17年, 18~28年, 29年以上) が類似していたことが挙げられる。年代による1要因分散分析を行った結果, 一部に有意な差が認められた (Table 2)。具体的には, 50代よりも20代の教師の方が, 「管理職」が支えになったと有意に認識していることが明らかとなった ($F(3, 290) = 2.77, p < .05$)。

Table 1 生徒との関係における悩みを抱えた教師への支えの性別による平均値の比較

		男性	女性	t 値
教師への支え	同僚	3.14(.59)	3.21(.59)	-.92
	教師としての自信	2.99(.51)	2.90(.54)	1.49
	管理職	2.76(.72)	2.51(.75)	2.82**
	責任感	2.59(.59)	2.61(.55)	-.22
	楽観的思考・気分転換	2.59(.63)	2.70(.54)	-1.50

** $p < .01$

Table 2 生徒との関係における悩みを抱えた教師への支えの年齢による平均値の比較

		20代	30代	40代	50代	F 値
教師への支え	同僚	3.12(.54)	3.21(.60)	3.10(.59)	3.23(.56)	1.22
	教師としての自信	2.86(.59)	3.00(.45)	2.92(.55)	3.13(.47)	1.56
	管理職	2.92(.72)	2.66(.75)	2.64(.74)	2.39(.75)	2.77* 50代<20代
	責任感	2.48(.57)	2.66(.46)	2.60(.64)	2.57(.58)	.75
	楽観的思考・気分転換	2.75(.60)	2.64(.64)	2.56(.56)	2.81(.54)	1.87

* $p < .05$

3 生徒との関係における悩みへの対処方略の性差および年齢差の検討

「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」尺度の下位尺度の基本統計量と性差および年齢による差を算出した。

始めに、性別による差異について検討した結果、一部に有意な差が認められた (Table 3)。具体的には、男性よりも女性の方が、「情緒調整」を有意に行う傾向が示された ($F(1, 290) = -3.32, p < .01$)。

次に、年齢による差異を検討するため、年代を4区分して1要因分散分析を行った結果、一部に有意な差が認められた (Table 4)。具体的には20, 30代の教師

Table 3 生徒との関係における悩みへの対処方略の性別による平均値の比較

		男性	女性	t 値
対悩みへの対処方略	積極的態度	1.94(.56)	1.96(.58)	-.33
	情緒調整	2.66(.57)	2.88(.55)	-3.32**
	問題解決行動	3.25(.71)	3.19(.69)	.64
	認知変容	2.89(.61)	2.92(.60)	-.47

** $p < .01$

Table 4 生徒との関係における悩みへの対処方略の年齢による平均値の比較

		20代	30代	40代	50代	F 値
対悩みへの対処方略	積極的態度	1.87(.56)	1.99(.54)	1.93(.60)	1.93(.51)	.42
	情緒調整	2.83(.48)	2.75(.52)	2.72(.64)	2.65(.49)	.40
	問題解決行動	3.01(.84)	3.09(.66)	3.35(.67)	3.29(.71)	4.08* 20,30代<40代
	認知変容	2.87(.61)	2.81(.54)	2.94(.64)	3.01(.60)	1.23

* $p < .05$

よりも、40代の教師の方が、「問題解決行動」を有意に行う傾向が明らかとなった ($F(1, 290) = 4.08, p < .01$)。

考 察

1 各尺度の下位尺度の検討

(1) 「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」尺度の下位尺度の検討

「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」の因子間の選択頻度の相違を検討した結果、他の因子と比して「同僚」が最も支えとして認識されており、次いで「教師としての自信」が挙げられていた。「管理職」、「責任感」、「楽観的思考・気分転換」においては、差は認められず、支えとしての認識は先にあげた二つの因子と比較し、相対的に低いものと認識されていた。

以下では、それぞれについて考察する。

始めに、「同僚」からの支えは、同僚の先生からの助言や励まし、愚痴を聞いてくれるような教職員間の雰囲気といった同僚の教師との関わりや良好な人間関係を示している。ソーシャル・サポートに関する研究では、教師の職場内のサポート源として同僚の教師の存在が大きいことが指摘されている（照井，1999）。田村（1999）によれば、「生徒指導上困ったときに誰の援助が受けたかったか」という問いに、45%の中学校教師が同僚教師の存在を取り上げている。中学校は教科担任制であり、学年単位での動きを重視しているという制度的な側面や、部活動に所属する生徒が多く、友人関係が複数のクラスに及ぶという生徒の活動範囲の側面からも、中学校においては特に他の教師との連携が必要不可欠である。このような中、教師が孤立せずに悩みに取り組む事は、教師の精神衛生を良好に保つものと考えられる。しかし、多くの先行研究において、中学校教師の悩みとして生徒との関係に次いで同僚教師との人間関係が取り上げられている（e.g., 田村，1999；網谷，2000）。このように、同僚との人間関係は逆に悩みの原因となる側面も有しており、このような悩みへの取り組みを支える以外の側面にも配慮する必要がある。

次に、「教師としての自信」は、教師としての自分を支える内的・外的な要因から成り立っている。教師としての自分を支える内的な要因として、精神的な強さ、教職への思いや情熱、信念が含まれている。教師としての自分を支える外的な要因として、職場における自分の力を発揮できる事柄の存在、生徒たちとの関わり、

保護者からの信頼や理解が含まれている。生徒との関係で悩みを抱いた場合において、これらの支えは教師としての自己の存在を安定させ、教師としての役割を有する自分への自信につながると考えられる。ここで、生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えとして、生徒たちとの関わりが含まれるという点が注目される。仮に、生徒との関係が上手くいかないことで悩む場面があったとしても、必ずしも全ての生徒において関係が上手くいなくなるわけではないため、別の生徒との関わりが教師を支える可能性を有していることが示唆される。

(2) 「生徒との関係における悩みへの対処方略」の下位尺度の検討

「生徒との関係における悩みへの対処方略」の選択頻度の相違を検討した結果、悩みへの対処方略として「問題解決行動」、「認知変容」、「情緒調整」、「消極的態度」の順に対処方略として選択されやすいことが明らかとなった。

選択頻度が高かった「問題解決行動」および「認知変容」は、他の二つの対処方略と比べ、悩み事象への積極的な対処方略である。教師のストレス対処方略を分類し、それぞれの有効度に関する教師の認識について検討した西村・小谷・井上・西川・石黒・中川・能（2001）によれば、分類された対処方略のうち、本研究の「問題解決行動」および「認知変容」に相当するような対処方略が、多くの教師にとってストレスへの対処として有効であるとみなされている。また、教師という職業に求められるパーソナリティについて新井（2002）は、子どもたちにきめ細かく関わることが要請され、理想に燃えたタイプが歓迎されると述べている。畠山・小野・仲沢（2000）も同様に、教師という職業においては、ストレス状況下においても、教育目標の達成への努力が求められることを指摘しており、「教師には『熱心さ』を価値とし、生徒に献身的に関わるのが『良い教師』と評価されるような風潮がある」（久富、1995）と言える。これらのパーソナリティへの志向が、それぞれの教師に価値として付与されているために、直接問題へと向き合う程度の高い順に、「問題解決行動」および「認知変容」が選択され、「消極的態度」の選択頻度が相対的に低くなったと考えられる。

2 生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えの性差および年齢差の検討

生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えの性差・年齢差を検討した結果、一部に有意な差が認められた。具体的には、女性よりも男性の方が、さらに50代の教師よりも20代の教師の方が、「管理職」が支えになったと有意に認識している

ことが明らかとなった。

「管理職」からの支えは、管理職からの助言や励まし、信頼や理解といった管理職との関わりや良好な人間関係を表している。ソーシャル・サポートの研究では、同僚に次いで、管理職の存在は大きなものである。田村（1999）においても、生徒指導上困ったときに誰の援助が受けたかったかという問いに、同僚教師の存在に次いで31%の中学校教師が管理職の存在を取り上げている。ただし、網谷（2000）によれば、管理職との人間関係もまた、教師にとってメンタルヘルスを悪化させる要因の一つとみなされており、注意を要する点である。以下では、性差および年齢差それぞれに関して考察する。

始めに、女性よりも男性において「管理職」は支えとして認識されやすいことが示され、男性教師が女性教師よりも管理職からの支えを大きいものとしていることが明らかとなった。照井（1999）においても同様に、男性教師は女性教師よりも管理職からのサポートを多く知覚している。Etzion（1984）によれば、職場でのストレス、本研究においては生徒との関係における悩みを軽減するには男性にとっては職場からの上司のサポートが有効であることが指摘されている。さらに、男性教師が管理職から支えをより多く知覚している背景要因の一つとして、男性の数が優勢であるといった管理職の性別の偏りによる影響などが推測された。なお、文部科学省による2006年度の学校基本調査速報においては、公立中学校管理職（校長および教頭）に占める男性の割合は20417人中19143人（93.8%）である。しかし、本分析においては悩む教師を支えた同僚や管理職の性別については検討していないため、管理職の性別の構成との関連については検討できず、今後の課題である。

次に、年齢に関して述べる。第一に50代以上の教師に関しては、そのほとんどが、現在管理職という立場であった。そのため、自らが他の教師を支える立場にあるために、他の管理職がいる場合においても支えとして認識されにくかったと考えられる。第二に、20代の教師に関しては、組織としての教師の人間関係の特徴によるものと考えられる。つまり、学校という組織においては教師の立場は年齢によらず、すべて同僚教師として基本的な立場は同一であるとされている。その中で、唯一上司に相当し、教職員の指導を行う立場に位置するのが管理職の存在である。教師という職について間もない20代の教師にとっては、そのような管理職の存在は、職場の人間関係の中で際立った存在と受け止められているのでは

ないかと推測された。以上の理由により、20代の教師は他の年代と比較して、相対的に管理職からの支えが大きいと認知されたものと考えられる。

以下では、各尺度の下位尺度の検討において得られた結果を踏まえながら、有意な差が認められなかった要因についても検討を加え、教師支援について総合的に考察する。

悩みを抱えた教師への支えの5つの下位尺度において「管理職」は、「同僚」および「教師としての自信」と比較して相対的に支えとしての認識が低いものであった。したがって、生徒との関係における悩みにおいては、性別の差異や年齢の差異によらず、男性教師は女性教師と比較して、20代は50代と比較して、それぞれ相対的に「管理職」が支えとして認識されているが、生徒との関係に悩む中学校教師の全般的な傾向としては、「同僚」や「教師としての自信」による支えが大きいと言える。その他の要因として、「責任感」は、多くの教師が日常的に抱いているものであると考えられるが、責任自体が教師としての役割に外的に付与されたものであり、その結果教師の内面に生じたものであると考えられる。以上の理由から、性別・年齢に関わらず、悩む教師の支えとして認識される傾向が低くなったと考えられる。また「楽観的思考・気分転換」は、悩みに取り組んでいくことを長期的視点から捉えた場合、悩みと距離を置くことによる一時的・一過的な支えに留まること推測され、性別・年齢に関わらず支えとして認識される傾向が低くなったと考えられる。以上の結果を踏まえると、生徒との関係に悩む教師を支援する上で、距離が近い他者から日常的に得られ、かつ悩む個人の内面から生じた思いによる支えに焦点を当てる必要性が示唆された。つまり、中学校の教職員集団全体に対して、悩む教師の支えとなるような同僚の関わりの増進や教師としての自信を得る機会の保証などが重要である。さらに、そのことを教師支援への基盤とした上で、20代の教師に対しては他の年代と比較して、また男性教師に対しては女性教師と比較して、管理職の働きかけが有効であることが、本研究の結果から示された。

3 生徒との関係における悩みへの対処方略の性差および年齢差の検討

生徒との関係における悩みへの対処方略の性差および年齢差を検討した結果、一部に有意な差が認められた。具体的には、男性よりも女性の方が、「情緒調整」を有意に行う傾向があった。また、20、30代の教師よりも、40代の教師の方が、

「問題解決行動」を有意に行う傾向があることが明らかとなった。

以下では、性差および年齢差それぞれに関して考察する。

始めに、女性は情緒を安定させることで悩みに取り組む傾向が示された。以下の研究は大学生を対象としてなされたものであるが、対処方略の性差について検討した神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野（1995）や金・小川（1997）においても同様に、女性が男性よりも情動志向の対処方略を多く用いることを指摘している。よって、教師という職業においてもその傾向が示唆されたと考えられる。

次に、20、30代の教師よりも、40代の教師の方が、「問題解決行動」を有意に行う傾向が示され、教師は年齢を重ねることで、悩みにより積極的に対処できるようになっていくことが示された。その理由として、「問題解決行動」は計画立案、情報収集といった具体的行動の実行より成り立ち、その際に具体的な見通しや蓄積された過去のデータといった経験による積み重ねが求められるためと考えられる。なお、50代以上の教師に関しては、ほぼ全員が管理職であったため、生徒と直接関わることのできる担任教師と比べて相対的に「問題解決行動」を主体となって行いにくいことが推測される。

以下では、各尺度の下位尺度の検討において得られた年齢差に関する結果を踏まえながら、有意な差が認められなかった要因についても検討を加え、教師支援について総合的に考察する。

生徒との関係における悩みへの対処方略の4つの下位尺度において「情緒調整」は、「問題解決行動」、「認知変容」に次いで選択されることの多い対処方略であった。また、悩みに向き合うことに消極的となる「消極的態度」は最も選択されることが少ない対処方略であった。したがって、生徒との関係における悩みにおいては、中学校教師の全般的な傾向として、直接悩み事象へと向き合う対処方略を選択する傾向があり、悩みに向き合うかどうかに関与を有していない「情緒調整」に関してのみ、性別による差異が見られるということが明らかとなった。以上のように、女性教師は男性教師よりも「情緒調整」の対処方略を選択する傾向のあることから、生徒との関係に悩む女性教師への支援策として、「情緒調整」を行うことが可能で、そのような対処法を行うことに対して寛容な職場作りなどが具体策として考えられた。さらに、生徒との関係に悩みを抱いた際に最も選択される傾向のある「問題解決行動」は、年齢による差異のあることが示された。ただし、問題解決行動はどの年代においても選択される傾向が最も高いこと

から、教師は教職経験を重ねる中で、「問題解決行動」を選択する傾向がさらに高くなっていくものと言える。このことは、悩む教師を支援する上で、中学校の教職員集団全体に対して、生徒との関係に悩む教師が悩み事象への対処方略を選択する上で過去の経験の積み重ねを問題解決行動の資源として有効に活用できるように支援することが重要であることを示唆している。そのことを教師支援への基盤とした上で、さらに、女性教師は男性教師と比較して、「情緒調整」を行う傾向があることから、その機会を保証する体制作りが有効であると、本研究の結果から考察された。

今後の課題

本研究では、中学校教師の生徒との関係における悩みに焦点を当て、そのような特定の状況における対処方略と悩む教師への支えに関してより詳細な検討を行い、それらと教師の個人属性との関連を検討した。具体的には、中学校教師という特定の集団に属する集団に関して、特に生徒との人間関係に悩みを抱えた状況下での悩みへの対処と悩みに取り組む上での支えとなったものについての全般的な傾向を把握し、基礎的なデータを得ることを目的としたため、個人属性として特に、性別と年齢に焦点を当てた。本研究の結果、現代の中学校教師の全般的な特徴が示された。今後は、本研究で得られた知見を教育現場の個々の教師に還元するために、生徒との関係に悩みを抱えた教師への支えおよび対処方略を規定するパーソナリティなどのその他の要因についても、さらに具体的に検討することが課題となった。

さらに、「生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え」および「生徒との関係における悩みへの対処方略」について、それぞれ以下の点について検討することもまた、課題となった。第一に、どのような支えが、悩む教師の悩みへの対処方略やメンタルヘルスなどの心理的側面にどのような影響を与えるのかについて検討を行う必要がある。第二に、対処方略と対処後の悩みの経過との関連、また支えにおける課題と同様に、悩む教師のメンタルヘルスなどの心理的側面にどのような影響を与えるのかについて検討を行う必要がある。

以上を明らかにすることは、生徒との関係に悩む教師への支援策構築への一助となると考える。

引用文献

- 網谷綾香 2000 日本における教師のメンタルヘルスに関する研究の概観 広島大学教育学部紀, 49, 221-225.
- 新井肇 1999 「教師」崩壊 バーンアウト症候群克服のために すずさわ書店
- 新井肇 2002 教師バーンアウトの「なぜ」と「どうする」 労働の科学, 57, 218-221.
- Burke, R. J., & Greenglass, E. 1995 A longitudinal study of psychological burnout in teachers. *Human Relations*, 48, 187-202.
- 原岡一馬 1990 教師の成長と役割意識に関する研究 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 1-22.
- 畠山義子・小野興子・仲沢富枝 2000 職業上のストレスとメンタルヘルス—義務教育に携わる教師と児童・生徒の問題行動との関連から— 山梨県立看護大学短期大学部紀要, 6(1), 85-97.
- 秦政春 1998 疲れきった教師たち—教師のストレス 教育と医学, 46(9), 729-737.
- 石井正典・中野明德 2001 教師のストレスとサポート体制に関する研究 福島大学教育実践研究紀要, 40, 17-24.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度(TAC-24)の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- 河村茂雄・国分康孝 1996 小学校における教師特有のピリーフについての調査研究 カウンセリング研究, 29, 44-54.
- 金愛慶・小川俊樹 1997 コーピング行動の性差の検討—性役割の観点から— 筑波大学教育心理学研究, 19, 79-90.
- 久富善之 1995 教師のバーンアウト(燃え尽き)と「自己犠牲」的教師像の今日的転換—日本の教員文化・その実証的研究(5)— 一橋大学研究紀要社会学研究, 34, 3-42.
- 宮本幸雄 1998 教師たちの悩み 同朋社
- 宗像恒次・椎名淳二 1988 中学校教師の燃え尽き状態の心理社会風景 土井健郎(監修) 燃え尽き症候群—医師・看護婦・教師のメンタルヘルス— 金剛出版 Pp.96-131.
- 中島一憲 2000 先生のストレスとその対処法 教育と情報, 503, 14-19.
- 西村馨・小谷英文・井上直子・西川昌弘・石黒裕美子・中川剛太・能幸夫 2001 教師の対人ストレス対処方略に関する臨床心理学的研究(4)—児童・生徒との関係におけるストレスと対処方略の類型化の試み— 国際基督教大学学報 1-A 教育研究, 43, 69-79.
- 田村修一 1999 中学校教師の被援助志向性に関する研究—自尊心およびバーンアウトとの関連に焦点をあてて— 平成11年度筑波大学大学院教育学研究科修士論文
- 照井康幸 1999 教師の受けるソーシャル・サポートがバーンアウト傾向に及ぼす影響—理想の教師像と自己評価のズレに注目して— 平成12年度筑波大学大学院教育学研究科修士論文
- 都丸けい子・庄司一子 2005 生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究 教育心理学研究, 53(4), 467-478.
- 齋藤浩一 1999 中学校教師の心理社会的ストレスサー尺度の開発 カウンセリング研究,

32, 254-263.

横島章 1988 学校の人間 島田一男（監修）講座 人間の心理 第3巻 学校の間人間
係 プレーン出版社 Pp.35-52.

Appendix 1

生徒との関係に悩みを抱えた教師への支え(都丸・庄司, 2005)

質 問 項 目

同僚

同僚の先生の励まし
悩みや愚痴を聞いてくれる同僚の存在
同僚の先生の信頼や理解
同僚の先生の協力や手助け
何でも話せる教職員の雰囲気

教師としての自信

精神的な強さ
教職への思いや情熱
自分の関わりかたが正しいという信念
職場で自分の力を発揮できることがある
生徒たちとの日々の関わり
保護者からの信頼や理解

管理職

管理職の励まし
管理職からの信頼や理解
管理職からの助言・アドバイス

責任感

教師なのだから何とかしなくてはという責任感
能力がないと見られたくないというプライド
周囲からの期待
周囲に迷惑をかけたくないゆえに頑張ろうという気持ち
日々の多忙さ

楽観的思考・気分転換

何とかなるだろうと悩みすぎない性格
何とかなるだろうという見通しや希望
気分転換できる場所や趣味の存在
時間が解決してくれるという希望
学校外での悩みを聞いてくれる人の存在

Appendix 2

生徒との関係における悩みへの対処方略尺度（都丸・庄司，2005）

質 問 項 目

消極的態度

自分にはどうしようもないので、仕方がないと思う
なるようにしかならないと思うようにする
あまりそのことを考えないようにする
何もしないで事の成り行きを見守る
たいした問題ではないと深刻に考えないようにする
状況が変化し何らかの対応ができるまで待つ
責任は自分だけにあるのではないと考える

情緒調整

今の状況を人にはなし、気持ちをわかってもらう
管理職や同僚に相談し、助言を求める
気分転換はかる
気を静めたり自分を励ます

問題解決行動

具体的な対策を立て、これからどうしたらよいかを考える
情報をいろいろ集める

認知変容

この経験から得るものがあると考え、よい機会だと思いうようにする
自分のやり方を変えるよう努力する
今の時点でうまく行ってる事を考える
